

驚異物語

黒沼健

驚異物語

黒沼 健



経 典 社 股



驚異物語

昭和三十三年八月十一日 印刷
昭和三十三年八月十五日 発行

定価 二二〇円
地方売価 二三〇円

著者 黒沼健

発行者 佐藤亮一
東京都新宿区矢来町七一番地

発行所 株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一番地

電話東京(34)代表 七二一(五九)
一六〇(五九)
振替 東京 八〇八番

乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替え致します。

印刷・二光印刷株式会社 製本・新宿 加藤製本所

© Printed in Japan

目次

南海に沈む大陸	五
地球爆発	一五
インカの碧玉	二七
死の日記	三七
「マリー・セレスト」第二の悲劇	四八
狂男爵フェ拉里	六
カルカッタの敗北	六
ニュールンベルグの孤児	八五
幽霊を売る男	三
切り裂き・ジャック秘譚	一〇一

ヨーロッパの謎	一〇九
殺人鬼の爪痕	一一三
新・残酷物語	一二五
空飛ぶ円盤人種	一四二
地球は狙われている	一六二
円盤を狙撃した話	一六八
九呎ずん胴の巨怪	一七三
化物蔓と食肉蝶	一八一
世界で一番強い酒	一八九
山上の海戦	一九四
木乃伊の手	二〇四

装 幀 前 川 直

驚
異
物
語



南海に沈む大陸

海底に眠る呪いに包まれた秘密の謎

巨人族

南太平洋の奇島というところ、われわれがすぐ頭に浮べるのは、巨大な人頭の石像で有名なイースター島である。

この絶海の小さな島に、この巨大な石像がどのようにして建造されたかについては、今日までのところ、その謎を明確に解いたものはない。

あるのは単なる臆測である。記録がないから、恐らくは先史時代のことであろう。南太平洋に高度の文化をもった大陸が存在していた。これが、あるとき忽然と海底へ沈んだのである。

記述者は、それを大西洋のアトランティスの海底沈没と同軌の事柄と説明している。

アトランティスは、そのあとに何も残さなかった。しかし、南太平洋の大陸のほうは、その遺物らしい小さな島を、各地に点々と残したのである。

その一つ、われわれの耳目に殆ど触れていないものに、ナンマトル珊瑚礁がある。

これはカロリン諸島に属する環状珊瑚礁だが、これを沈没大陸の遺物と目するのは、この珊瑚礁に残存している、いろいろの遺跡によるのである。石造建物や城砦の遺跡、地下トンネル、礼拝堂と思われる建物の跡、その他の岩石を利用して建造物は、この付近に現存する土人の頭と手をもつてしては絶対に造れるものではない。さてこそ、この地方に往時繁栄を極めた文化の存在を認めなければならなくなつたのである。

しかも、高度の文化をもつたこの地方の先住民は巨人族ではないかという新説まで出ている。

今度の戦争の直前、ドイツのハンブルグの美術館は、二人の科学者をこの地方に派遣した。これが、たまたまナンマトルの珊瑚礁の中から、一本の大腿骨を発見した。

二人のドイツ科学者の鑑定の結果は、男性のもの、発見された個所の地層から判断して、五百年以前に埋没されたものと推定された。生き残つた先住民の一人であろう。

この大腿骨はベルリンはもちろんのこと、パリ、ロンドンの人類学協会で精密に調べた末、骨の主は、体重三百ポンド、直立したときの丈の高さは、七フィート二インチにも及ぶと計算された。

ところが、現在この地方に住んでいる土人たちは、身長は平均五フィート六インチぐらいしかない。右にあげた大腿骨の主と同種族とはちよつと考えられないのである。大腿骨の鑑定にあつた人類学者たちは、この骨の主の起原を西欧人に求めたのである。つまり環状珊瑚礁の遺跡は、西欧からの伝来文化に基くものではないかと推断した。

往時の遺跡？

一九二一年のはじめというから、第一次世界戦争が終結を付けてから間もなくのことである。

一人のニュー・ジランド人が、南海を遍歴の末、ポナベへやつてきた。マニオン・ギルバートという、三十歳のどちらかというに向う見ずの男だつた。

青い海に、豊富な魚族、陸には熱帯の美味い果物がある。それに情欲あふるばかりの南海の美しい乙女たち。しかも、この南の乙女たちは、結婚したが最後、御亭主を絶対に働かせない。朝から晩までノラクラしていれば、家政のほうは細君が身を粉にして働いてまかなつてくれる。これこそは、まさにこの世のバラダイスである。ギルバートは、島の乙女と結婚して、生涯をここで暮し

てもいいと考えた。

ところが彼は、ある日、土人の口から大変なことを聞いたのである。

「ナンマトルには、すばらしい宝が隠されている。だが、これには呪いがかけられているから、それを手に入れようとしたものは皆んな死ぬ」

「その宝というのは、どれくらいのもんだ？」

ギルバートは土人にきいた。

「それは、たくさん、たくさん、とても数えきれない」

土人は両手と両足の指を使つて計算に大童である。ギルバートはこれを見て、天文学的な数字になるのではないかと読んだ。彼は、その額を五十万ドルと踏んだのである。

億とは行くまいが、さりとて百万ぐらいの単位ではなさそうだ。

五千万あれば、南海の色の黒い土人の乙女を女房にしながら、ヨーロッパの立派な都市で、一年贅沢三昧の日が送れるというものだ。

彼は、ひとつその宝物を探してやれと思った。

土人には魚を捕りに行くのだといって、カヌーを一隻借り、一本の槍と一挺のナイフを武器に、単身ナンマトル環礁へ向つて出発した。

熱帯の太陽は彼の背を容赦なく灼く。ロースト・チキン

だったら、ひっくり返して腹のほうを灼かなければならぬ頃、紺碧の水のかなたに、灰白い環礁をみとめた。

もうひと息と、彼は權を握る手に力をこめた。やがて底が、ジャリ、ジャリと音がしてカヌーは珊瑚礁の中へ入った。目の前には緑の熱帯樹の繁みが見えた。

彼は島に上陸すると、繁みの中へわけ入った。進むにつれて、下草や熱帯樹は、いよいよ行手を遮る。ちよつとしたジャングルである。

彼は槍とナイフで、生いかぶさる草や木の枝を切りはらいながら、あたりを細心に見ることを忘れなかった。

それが何処にあるか、正確なことは知らない。しかし、この島の何処かにある、と彼は信じていた。

それから、どのくらい経つたろう。蒸風呂さながらの繁みの強行軍に、全身は滝のような汗でおおわれ、彼は肩で、せいぜい息をしていた。

まさにそのとき、彼は求めるものを見たのである。

崩れた石の壁、階段、かつては城砦の一部ではなかったかと思われる建物の跡。

彼はその先にとんな危険が待ち構えているか、そんなことにはお構いなく、低地につづく階段を降りて行つた。幅は四フィートほど、それを十フィートばかり降りると、トンネルの口があつた。



た。が、そこにあるものを見ると、彼は興奮のあまりに、深い溜息を洩した。

その室の中央には祭壇があったからだ。

それはボナベの土人たちのものではない。もつと高度の文化をもっていた人たちのものである。噂に聞く、失われた文化の片割れに違いない。

「ついに巨万の宝を探しあてたぞ！」

彼は懐中電燈で、あたりを照した。と、早くも宝物の一つが見つかった。

何百年間かの塵が表面を青黒く酸蝕している十字架であ

そのへんは、すでに海面下であるはずである。しかし、いかなる建築法によったものか、空気はカラカラに乾いて、熱帯に特有の湿気は少しもなかった。

トンネルは三十分イートばかりつづいていた。それを抜けると円形の室に出

った。彼はナイフを取り出すと、その表面をゴリゴリと削った。中からは燦然たる光が放った。黄金の十字架であった。

ギルバートは時計を見た。時刻は夕暮れ近かった。島には、夜になると狂暴な大蜥蜴おおもろびが出没すると土人から聞いていたので、彼はトンネルを抜けて表へ出ると、急いで海岸へとって返し、カヌーへとび乗ってボナベへ戻った。

黄金の十字架

ギルバートがナンマトル環礁の地下の祭壇の跡から発見した十字架は、マルタの十字架という、棒の端が、三個の半円で飾られている特殊の型のものだった。

彼は、それをもって故郷のニュー・ジールランドへ帰った。ボナベではできない、その金の分析を専門家に頼み、併せてその十字架の謂われを調べたかったからである。

分析にあたった政府機関の化学者は、このような純度の高い金は、かつてこの地方で発見されたことはないといった。

製作年代の鑑定を依頼された歴史家は、いかなる土人の手によって造られたものか不明である、といった。そして、この地方へ将来されたのは初期キリスト教時代、即ち

紀元三世紀か四世紀の頃ではないか、と推定した。

それが、どのようにして将来されたか、それは、全然の謎であった。

ギルバートの黄金の十字架は、たちまちニュー・シード中の評判となった。

千五百ポンドで売らないか、という好事家（こうざ）があらわれたが、彼はそれを断り、そのかわり百ポンドの金を借り、それを旅費にして、ロンドンへ渡った。世界的に有名な美術商クリスティーに、十字架の真価のほどを鑑定（かんてい）してもらうためであった。

クリスティーでは、二千ポンドなら、いつでも頂戴（ちやうだい）するといったが、その矢先に、あるアメリカ人の代理と称するウィルスン・メスナーという男があらわれて、自分のほうでは三千五百ポンド出すがどうであらう、と話をもちかけてきた。

ギルバートは、はじめから黄金の十字架には、それほど執心はなかった。彼の本来の望みは、もう一度ナンマトル環礁へ引き返し、地下の祭壇の附近をだいたい的に調べることだった。それには道具や装備がいるし、船も立派なものが欲しい。十字架よりは、その費用をまかなうほうが必要だったのである。

メスナーとの商談は、たちまちOKとなり、十字架はこ

の男の手に渡った。

ところが、その機に及んで、イギリス政府は騒ぎ出したのである。何とかして、これをメスナーの手から取り戻し、大英博物館の所蔵にしたいと考えた。こうして秘密裡に、ウィルスン・メスナーの搜索がはじめられたが、メスナーというのが偽名か、それともさらに別の名前を名乗ったものか、イギリスの諸港から出帆した船には、メスナーなる人物はどれにも乗っていないかった。

これが一九二一年の八月のこと。以来、問題の黄金の十字架は、今日まで誰の目にも触れていない。

ギルバートは、メスナーから受取った金で四十五フィートの三檣帆船（さんそうはんせん）を手に入れ、イギリス人の水夫三人を雇い、ボナベに向って長い船旅の途についた。

彼は、この三檣帆船（さんそうはんせん）に『鵬』という名をつけた。だが、この『鵬』号には、ナンマトルの宝物の呪詛（じゆ）がすでにかけられていたのである。『鵬』号は、ボナベにはついに着かなかった。トラック諸島まで迫りつき、最後のコースに向って間もなく暴風雨に襲われたらしい。九カ月後、トラック諸島のある珊瑚礁に『鵬』と書いてあるボートの破片が漂着したのが、その最後だった。

ギルバートと三人のイギリス人の水夫は、南海の藻屑（もくず）と消えたのである。

ブラウン教授の調査

翌一九二二年の末のこと、四組の探検隊がナンマトル環礁で顔を合わせた。

この四組の探検隊が、ナンマトルでどんなことをやらかしたかは、正確なことは伝えられていない。

以下は周囲の情況からの推測だが、四組の探検隊の総人員は二十九人。ところが、そのうちの十九人が、忽然とナンマトルから姿を消したのである。

しかもボナベから取調べの役人が出張したときには、残る七人も、いつとはなく珊瑚礁から姿を晦ましてしまった。

砂浜や岩礁の上に残された夥しい血痕から、四組の探検隊員の間に争いが起り、十九人は殺されて海へ投げこまれ、鯨の餌食になったのではないかと解釈された。

ボナベの人たちは、これをギルバートに次ぐナンマトルの宝物にかけられた呪詛の犠牲者として、いずれも怖気をふるった。

しかし、ここに土民たちの迷信を無視してナンマトル環礁の調査に向った人物があった。

ニュー・ジーランドきつての歴史家であり考古学者であ

るマクミラン・ブラウン教授だった。

教授に呪縛の土地の調査を思い立たせたのは、あの地下の遺跡が包蔵すると考えられている莫大な宝物ではなかった。彼はむしろそれらの宝物に繋がる文化の淵源のほうをきわめたかったのである。

実地調査に先立って、ブラウン教授は半年を図書館に立てこもった。そして古文書、古記録を丹念に調べた。それによって彼は一つの仮定を組み立てたのである。

教授は、その手記に次のように書いている。

「……いまから一万年前、南太平洋には宏大な大陸があった。それが火山の爆発か大地震のため、一挙に海底へ陥没した。現在、洋上に点在している多くの島嶼は、当時の大陸の形見なのである。

この大陸には、高度の文化をもった人間が、一大国家を建設していた。この事実を考慮に入れなかったら、ナンマトル環礁にある遺跡の説明はつけられない……」

ブラウン教授の計算によると、海底へ陥没した大陸は、マリアナ諸島のへんを中心に、イースター島の南から、南米のチリーの北方海上につながる二千マイルの広袤をもっていたらしいのである。

教授は環礁の内部を探検する前に、潜水のうまい土人を雇って、外部海底の調査にとりかかった。

ところが土人の潜水夫というのは、何の装備もなく、いきなりジャブンとび込むのだから教授が望むような調査は思いもよらなかった。深さは三十尋が限度である。しかも、その深さまで潜れるのは、土人の中になつた二人しかいなかった。

三十尋ときいて、ブラウン教授はがっかりした。そんなところに、陥没した大陸の遺跡があるはずはないと思つたからである。

が、とにかく潜らせることにした。いかなる結論も実証を伴わないものは、信憑性を欠くからである。

こうして二人の土人はナンマトルの南の海中へ潜つた。ところが、その一人は、ついに海面へは戻つてこなかった。

すると残つた一人は、

「ナンマトルの呪いです。もう潜るのはいやです」

といつて、自分の島へさつさと引揚げて行つた。

マクミラン・ブラウン教授の調査は、こうして挫折のやむなきに至つた。

玄武岩の堀

一九三〇年、ジム・ドナルドソンという潜水夫が、ナン

マトルの海底岩礁に挑戦した。

彼は当時の最新式の潜水服に身を固めて、環礁の南方の海底を探つたのである。土人の道具なしの潜水と違つて彼は九十フィートの深さにまで達した。そこが海底と思つたが、少し進むと、その先に断崖があり、底の知れぬ大洋が黒々と大きな口を開いている。

ドナルドソンが海底と思つたのは、実は海中の岩棚であつたのだ。が、彼はその岩棚に、珊瑚に蔽われた石造物の跡と思われるようなものを発見した。

見ると、その崩壊した建造物の両側には、円形の石の堀のようなものが、附属している。形状から判断すると、どうやら寺院建築のように見える。

彼は念のために、その石堀の一角を欠いてきた。潜水船に戻つて見ると、それは玄武岩である。

玄武岩の堀！ これこそは、往時の文化の跡でなくなつてあらう！

「おれは、もっと深く潜つてみる」

彼は仲間のサリヴァンとタッカーの二人にいった。

「この潜水服では、百三十フィートが限度だ。ことによると、岩棚の先はもっと深いかも知れない。百三十フィートで海底に届かなかつたら、そのときには合図をするから、すぐに引揚げてくれ」

彼は、しばらく休憩すると、もう一度潜った。

九十フィートで潜水は停った。玄武岩の罅があるという岩棚に達したらしい。

それから、いよいよ深海を目ざす潜水がはじまった。

百フィート……百十……百二十……。

ついに百三十に達した。だが、彼からは引揚げの合図はない。

そして百四十に達したとき、合図があった。

しかも、それは急を告げているふうに、引綱をグイグイと続けさまに引張っている。サリヴァンとタッカーは慌てて引揚げにかかった。

ところが五フィートばかり引揚げたとき、綱は動かなくなった。綱が何かに絡みついたか、それともドナルドソンの体が、何かに阻まれていたのか、ありたけの力を出してウンウンやるのだが、綱はピンと張ったままビクともしない。

船には余分の潜水服の用意はなかった。潜って下の様子を見ることもできず、弱っていると、土人の人夫の一人が、「私が潜って、下の様子を見てきましょう」と悲壮な申出をした。

「潜るって——ここは百四十フィートあるのだぞ。潜水服なしで、そんな無茶なことができるか！」

サリヴァンが窘めるようにいうと、

「私は、大將を助けなければならない！」

というが早いか、ザブーン！と海中へ身を躍らした。

一同が固唾をのんで待っていると、やがて海面に土人の頭が浮んだ。その顔には血の気はなかった。船の上へ引揚げたときには、肺はいまにも破裂しそうになっていた。

「章魚です。恐ろしく大きな章魚が、大將をつかまえて離さないのです」

妨害物の相手が章魚とわかると遠慮はいらなかった。船にいる連中は、引綱にかじりついて、力の限り引張った。

そのうちに綱はスルスルとあがってきた。が、引揚げられた綱の先には何もなかった。それは鋭利な刃物で切断されたように切られていた。ドナルドソンの体は、ついに引揚げられなかった。

つづく宝探し連

その翌年、ケン・ステイーヴンスという潜水夫が、ナンマールの沖で、百五十フィートの深さまで潜った。

が、百五十フィートに達したとたんに、彼は非常信号を送った。引揚げられたときにはステイーヴンスは真蒼な顔をして、吐気を訴えた。潜水病にやられたのである。

健康体になってから、彼はそのときの模様を話したが、百五十フィートまで降りたとき、彼は岩棚の裾の岩壁に大きな洞窟を発見した。

そこで近よって燈火^{あかり}を向けると驚いた。中には、何十、何百と知れぬ人食鯨^{あさり}が、身動きがでできないくらいギッシリつまっている。

それがステイーヴンスの燈火^{あかり}に刺激されて、いまにも彼に襲いかかろうと、攻撃の態勢をとっているのである。彼は無我夢中で、合図の引綱を引いた。

「あんな恐ろしい目に遭ったのは、生れてはじめてです」
考えてもぞっとする、といわぬばかりだった。それから十五年ばかりの間、ナンマトルの海底の宝物は、世の宝探しの連中から忘れられていた。

ところが一九四六年の春、一隻のヨットが思い出したようにポナベに到着した。それには五人の人間が乗っていたが、ヨットをナンマトルの沖に廻すと、最新式の金属発見装置^{きんぞくはっけんしやう}を使って、宝探しをはじめた。

この連中は六週間、環礁の間を掘りちらした後、引揚げて行った。何を発掘したのか判らないが、その収獲物はロンドンで三千ポンドに売れたということが、風のたよりに伝えられた。これにつづいて次には濠洲隊が到着した。これは、もっぱら干潮時を狙って、水際で仕事をしていた。

この一行の発掘品も発表されなかった。

翌一九四七年にも、濠洲人の宝探しがやってきた。この男はアレグザンダーといった。単身ポナベへやってくと、早速土人の人夫を雇ってナンマトルへ向った。

アレグザンダーはナンマトルに三週間滞在していたが、ポナベへ戻ってくると、煙草入れいっぱい^{いっぱい}の獲物を披露して、喝采を博した。

それは精巧な細工を施した腕輪、足輪、その他の装飾品^{びやうぶ}だった。地金は純金、そして中にはダイヤモンド^{ちうりや}を鑲めたものもあった。

アレグザンダーは腕木付きのカヌーを借りると、四人の屈強な漕手^{こしやう}を雇ってラバウルへ向った。定期船はポナベには寄航しなかったからである。

ところで宝物の呪縛はここでまたアレグザンダーの身を襲うところとなった。ポナベを出発して間もなく、アレグザンダーと四人の漕手の消息は絶たれたのである。

宝物の番人

それから二年後の一九四九年、濠洲の砲艦が突如ナンマトルの沖に姿をあらわした。この環礁へ向ったまま行方不明^{みょうぼう}を伝えられている一濠洲人の搜索^{さうさく}のためだった。

南側の問題の岩棚のある近くの岩礁の間に、砲艦の連中は、一個の腐爛死体を発見した。死体にまつわりついていた衣類の切れっ端から、当の行方不明者ということが判明したが、死体は鋭利な刃物のようなものでスタズタに引き裂かれ、人間の形をした一つの肉塊にすぎなかった。

「この珊瑚礁に棲んでいる大蜥蜴の仕業です」

と案内の土人はいった。長さ六フィート、重さ六十ポンドという物凄いのが、そこにはウヨウヨしているのだという。こちらから向って行かなければ別に危害も加えないが、一朝怒らすと俄然狂暴になる。これが宝物の番人然と控えているのである。

番人は海にも恐ろしいのがいた。猛烈な毒をもった海蛇である。これは何か動くものを見つけると奮然と襲いかかつて咬みつく。これに咬まれたが最後、三分間で絶命する。しかも、この毒には解毒剤が発見されていないという甚だ厄介なものである。それから前に書いた人食鯨に大章魚。そういった恐ろしい面々が頭張っているに拘らず、ナンマルトの宝物を目ざしてやってくる欲の皮の突っ張った連中は、次から次とあとを絶たない。

最近では一九五四年の十一月、単檣帆船でボナベへやってきた二人の宝探しがいた。身許は、二人の名前がストダードにペンダーということしか判っていない。二人は、帰

りにはお土産をたんまり持ってくると、顔中でニヤニヤしながらナンマルトへ向った。

が、その翌日には、環礁でどんな目に遭ったのか、歯をガチガチいわせ、死人のような顔をして帰ってきた。

島の人たちが、どうしたのだ？ と訊いても二人は返事をしなかった。

「これから何処へ行きなさる？」

と訊くと、

「ブーゲンヴィルへ——」

といって匆々に出発した。だが、この単檣帆船はブーゲンヴィルには着かなかった。世界の何処の港にも着かなかった。

こうしてナンマルトの海底の宝物にまつわる呪縛の伝説は、次々と犠牲者の数を増して行く。